サビエル生誕五百年 巡礼の道 97

藤屋 侃士（下松市幸ケ丘）

混迷のパレスチナ

この分離壁のためパレスチナ人は自由にイスラエルに入ることはできない

今から十五年前の一九九三年、イスラエルとPLO（パレスチナ解放機構）の間でオスロ合意文書が調印された。

これは、長く紛争が続くパレスチナ問題を「ヨルダン川西岸地区とガザ地区のパレスチナ人のために、自治政府を選挙で設立することで解決を図る」というものである。

行き詰まり状態にあったパレスチナ問題で世界のメディアはオスロ合意を「歴史的な和解」「新しい時代の到来」として大きく伝えた。

私の娘、リカは広島市で保健婦として働いていたが、パレスチナの母子のために働きたいと公務員をやめ、オスロ合意二年後の一九九五年にパレスチナに出向いた。あれからもう十三年が過ぎた。

しかし、オスロ合意にもかかわらず、情勢は混迷を深めている。娘は七年間、現地で働いたが、いったん帰国し、現在は大学院で国際保健学を学びながらJVC（日本国際ボランティアセンター）のパレスチナ事業担当としてパレスチナに関わり続けている。

先日、ラジオ番組収録のため帰宅した。この巡礼記はトルコ巡礼の途中ではあるのだが、今回と次回は〝ガザという牢獄〟パレスチナ問題を取り上げることにする。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地パレスチナには私も二度訪れた。

第二次世界大戦後の一九四八年、国連も加担し、ユダヤ人の国イスラエルがパレスチナに建国された。それに反対するアラブ諸国との間で第一次中東戦争が起こる。

一九六七年の第三次中東戦争で、イスラエルは国連がパレスチナ人の土地としたヨルダン川西岸地区、ガザ地区も占領し、大勢のパレスチナ人が難民となった。

現在、イスラエルとヨルダン川西岸地区との境界のほとんどはイスラエルが一方的に建てた巨大な壁が連なり、それも境界線上ではなく、パレスチナ自治区側の領土に入り込んで建てられている。

検問するのはすべてイスラエル兵で、自由に往来することはできない。ガザ地区はさらにひどく、陸の孤島である。

二〇〇六年に実施されたパレスチナ評議会選挙で、アメリカ、イスラエルから〝テロ組織〟として烙印を押されているハマスが圧勝した。しかし、イスラエルもアメリカもハマスを認めない。

現在どうなっているかといえば、ヨルダン川西岸地区はアッバス議長らのパレスチナ自治政府が、ガザ地区はハマスが治め、パレスチナ人同士が対立するという最悪の状況になっている。

ますます混迷を深めるパレスチナは今後どうなるのだろうか。

昨年七月、東京でも「内紛と分裂？パレスチナはどうなるのか」という緊急シンポジウムが開かれ、娘もパネリストとして出席した。

そのシンポジウムの様子は岩波書店から「パレスチナはどうなるのか」（四百八十円）という小冊子になって販売されている。

またKRYラジオでも日曜朝七時四十五分からのサンデーゴスペルで、四月六日、十三日、二十日の三回、この問題について放送される。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

小冊子「パレスチナはどうなるのか」